

図書館だより

第154号

2024年 3月 4日(月)発行
茨城県立筑波高等学校 図書委員会

☆「語呂」について学んでみよう！

前回、第153号では「語彙」についてお伝えしましたが、本号では似ているようで全く違う単語「語呂」についてお伝えします。

「語呂」とは言葉や文章の続き具合、調子のことでももとは雅楽における旋法に由来します。雅楽ではうまく演奏を合わせられないことを「呂律が回らない」と言いました。これを言葉の調子になぞって「語呂」といいます。ちなみに「語呂がよい」とは語調の感じが良いことをいいます。



☆図書館利用について

皆さんは今年度どれだけ本を読みましたか。図書館では様々な本の貸し出しを行っています。その中から自分にぴったりの本が見つかるかもしれません。図書館で本を借りてみましょう。

図書館は昼休みと放課後に開館しています。特に昼休みは昼食をとることができます。コミュニケーションの場としても利用できますのでぜひ、ご来館ください。

☆先生が卒業生に勧めたい本

大木先生のおすすめ

『ざんねんないきもの事典』

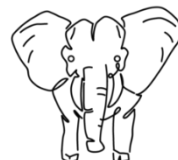
著者 今泉忠明（監修）
下間文恵
徳永明子
かわむらふゆみ（イラスト）
出版社 高橋書店



『ざんねんないきもの事典』は、不思議で奇妙な生物たちを紹介した魅力的な本です。

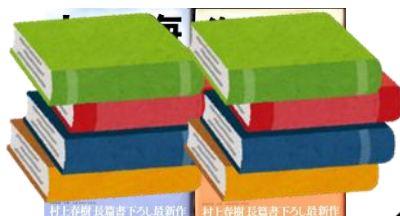
見た目や特異な行動パターンなど、通常の生物学書では取り上げられることの少ない生物の特徴について紹介されています。これらの生物たちの世界に没頭し、生物がもつ多様性と奇妙さを理解することができます。

皆さんにもこの本を通じて、自然界に住む驚異的な生物たちに触れ、新たな視点で世界を見つめる喜びを味わってもらいたいと思います！



『海辺のカフカ』

著者 村上春樹
出版社 新潮文庫



【あらすじ】

「君はこれから世界でいちばんタフな15歳の少年になる」

15歳の誕生日がやってきたとき、僕は家を出て遠くの知らない街に行き、小さな図書館の片隅で暮らすようになった。家を出るときに父の書斎から持ちだしたのは、現金だけじゃない。古いライター、折り畳み式のナイフ、ポケット・ライト、濃いスカイブルーのレヴォのサングラス。小さいころの姉と僕が二人並んでうつった写真…。

思春期特有の青春の葛藤など、情景、心理描写が細かく正確で物語に熱中してしまうような読み応えのある作品です。

主人公である「僕」と時折挟まれる猫と話せる老人「ナカタ」のストーリーがどのように交わっていくのかを楽しんでもらいたいです。

☆今年度受け入れた本の注目タイトル

『博士の愛した数式』

著者 小川洋子
出版社 新潮社



【あらすじ】

「ぼくの記憶は80分しかもたない」

博士の背広の袖には、そう書かれた古びたメモが留められていた。——記憶力を失った博士にとって私は常に“新しい”家政婦。博士は“初対面”の私に靴のサイズや誕生日を訪ねた。数字が博士の好きな言葉だった。やがて私の10歳の息子が加わり、ぎこちない日々は驚きと歓びに満ちたものに変わっていく。あまりに悲しく暖かい、奇跡の愛の物語。

『ゴールデンスランバー』

著者 伊坂幸太郎
出版社 新潮文庫



【あらすじ】

衆人環視の中、首相が爆殺された。

そして犯人は俺だと報道されている。なぜだ？何が起きているんだ？俺はやっていない——。首相暗殺の濡れ衣をきせられ、巨大な陰謀に包囲された青年・青柳雅春。暴力も辞さぬ追手集団からの、孤独な必死の逃走。運命の鍵を握るのは古い記憶の断片とビートルズのメロディ。スリル炸裂超弩級エンタテインメント巨編。